

C-4

ベンガル語動詞 *pôra* (おちる) の多義構造の分析

石川さくら (東京外国語大学)

要旨 本稿はベンガル語の動詞 *pôra* (おちる) の本動詞としての使用を対象にその多義性を認知意味論の観点から分析する。*pôra* は「おちる」だけではなく、日本語で「当たる」「つく」「生じる」などと表現される事象にも使用される多義語である。その意味は、上から下への空間移動「おちる」という語義を概念的な中心義として、中心となるイメージスキーマ「おちる」とそこからイメージスキーマ変換を経た3つのイメージスキーマ「着点につく」「起点から出る」「結果状態」で表せることを提案する。また、それぞれのイメージスキーマのタイプの中でもトラジェクターとランドマークの関係性により語義を区別することができ、メタファーやメトニミーといった意味拡張と合わせて多義ネットワークが形成されていると考えられる。

1. はじめに 本稿はベンガル語の動詞 *pôra* (おちる) の多義性を認知意味論の観点から分析することを目的とする。この語は本動詞、いわゆる複合動詞の後項動詞、修飾の機能を持つ語であるが、本稿は本動詞としての使用に着目する。なお、慣用句としての使用時の分析は今回は割愛する。イメージスキーマやメタファー、メトニミーの概念を援用し、それぞれの語義が共時的ネットワークを形成していることを検討する。

pôra について、ベンガル語・英語辞書の *Samsad Bengali-English dictionary* 第3版 (2000) には動詞として23の語義が、またベンガル語・ベンガル語辞書の *Bangla Academy Byabharik Bangla Abhidhan* 改訂版 (2000) では16の語義が項目として立てられ記述されている。この語は、上から下への物理的な位置変化「おちる」という意味だけではなく、日本語に訳すと「つく」「入る」「生える」「当たる」「なる」など多様な意味を持つが、これまで意味の拡張とそのネットワークが分析されることはなかった。

2. 先行研究 これまでに認知意味論の観点からベンガル語動詞 *pôra* を分析した研究は管見の限り見当たらない。ここではこれまで *pôra* が辞書でいかに記述されてきたかを見る。前述した2つの辞書を取り上げる。

Samsad Bengali-English dictionary 第3版 (2000)

No.	語義	No.	語義
1	to fall, to drop	13	to be caught in
2	to fall down, to drop down	14	to be affected with, to contact, to incur
3	to come to, to fall into	15	to come across or fall upon
4	to be uncultivated	16	to set in for a spell
5	to be vacant or unoccupied	17	to come upon, to strike, to occur
6	to stay or remain	18	to require or involve or to involve an expenditure
7	to be unpaid or unrealized, to get into arrears	19	to exude, to ooze, to flow out
8	to be outstanding	20	to fall off, to shed or to be shed, to fall
9	to set in, to begin, to ensue	21	to terminate
10	to attack, to raid	22	to be allayed
11	to infest	23	to be abated, to decrease
12	to be attacked		

Bangla Academy Byabharik Bangla Abhidhan (2000)

No.	語義	No.	語義
1	落下する	9	価値が下落する
2	閉じ込められる	10	危険に陥る
3	つく	11	抜ける
4	攻撃する	12	費やされる
5	感染する	13	落ち着く
6	始まる	14	合う
7	流れる	15	残される
8	視界に入る	16	終わりになる

いずれの場合も他の表現でどう言い換えられるかを記述したのみで、どの語義からどう派生してこのような多義が形成されているのか見えてこない。

3. 分析手法

4つの観点

- ① 項構造：どういった項をいくつとるか、起点と着点が見られるか
- ② イメージスキーマ：事象は空間的にどのように表されるか
- ③ トラジェクター (TR) とランドマーク (LM) (起点または着点) の関係性
- ④ 意味拡張の性質：メタファーかメトニミーか

用語の定義

イメージスキーマ：「日常的、具体的な経験のなかで繰り返し現れる（比較的単純な）パターン、形、規則性」(Johnson 1987: 29) [日本語訳 (松本 2003: 65)]。このイメージを基に、事象における参与者とそれらの関係性を明らかにしていく。そこで登場するのが、TR と LM の概念である (Langacker 1987) が、前者は「主要な注目対象となる (中略) ような際立ちを与えられるもの」(坪井&早瀬 2020: 40) であり、後者は「(トラジェクター) に次ぐ際立ちを与えられるもの」(坪井&早瀬 2020: 40) である。特に空間表現ではこの2つの関係によって意味が表され、これまで英語の空間前置詞をはじめとして多くの研究がなされている (Lindner 1982, Langacker 1987, Dewell 1994, Fukada 1997 など)。

メタファー：「2つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩」(靱山&深田 2003: 76)。

メトニミー：「2つの事物の外界における隣接性、さらに広く2つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩」(靱山&深田 2003: 83)。

概念的な中心義：「多義語においては、基本義からの意味派生によって派生義が生じて」おり、その派生には「概念的な中心義」が関連している (松本 2021:1)。それは「多義語の持つ意味の中で最も基本的な意味であり、派生の元をたどっていったときに、最終的に行き当たる意味 (派生の起点)」である (松本 2021:1)。

4. 分析

pôra の多義ネットワークは、大きく4つのイメージスキーマのタイプ (図1参照) から成ることを提案する。

A) 空間における起点から着点への上下位置変化

- B) 着点につく…上から下への位置変化に限らない。着点に対する部分がプロファイルされ、経路の部分焦点化のイメージスキーマ変換が発生している。
- C) 起点から出る…上から下への位置変化に限らない。起点から発する部分がプロファイルされ、経路の部分焦点化のイメージスキーマ変換が発生している。
- D) 結果状態…上から下への位置変化を意味しない。変化の結果に着目した結果状態へのイメージスキーマ変換が起こっている。起点と着点は焦点から外れる。

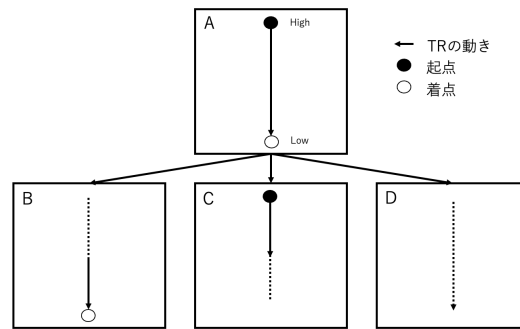


図 1 *pôra* のイメージスキーマ

A のイメージスキーマを元にしてイメージスキーマ変換を経て B から D のイメージスキーマが派生している。下記ではそれぞれのイメージスキーマで意味拡張を経てネットワークが更に広がることを見ていく。4 つのイメージスキーマのタイプごとに意味を記述していく。

A) 空間における起点から着点への上下位置変化

このタイプでは、空間における上に位置する起点から下に位置する着点への TR の位置変化が基本的な意味である。そこからメタファーやメトニミーを通じて意味の拡張も見られる。いずれの場合も TR の上下移動というイメージが保持されているのがこのタイプの共通の特徴であると言える。

A-1) 人や物が重力に従って上の位置・場所から空間を経由して下の位置・場所に落下する

A タイプのスキーマを率直に表したものがこの語義に当たる。A タイプは 4 つのイメージスキーマのタイプの派生元なので A-1 が派生の中心を担う概念的な中心義であると言える (A タイプに属する他の語義はメタファーやメトニミーによる意味拡張から成る)。起点と着点の明示が可能で、明示されない場合も暗示的であるだけで文脈から推測することが可能である。なお、典型的には、起点は名詞+後置詞 *theke*、着点は名詞の所格で表現される (以降の語義でも同様)。

- | | | | | |
|-----|-------------|--------------|-----|---------------|
| (1) | <i>bari</i> | <i>theke</i> | (2) | <i>desh-e</i> |
| | house | from | | country-LOC |
| | 家から | | | 国で |

- | | | | | | |
|------|--------------|--------------|---------------|----------------|------|
| a(1) | <i>akash</i> | <i>theke</i> | <i>pathor</i> | <i>por-l-o</i> | (作例) |
| | sky | from | stone | fall-PST-3 | |
| | 空から | 石が | 落ちた。 | | |

A-2) 概念・状況・出来事が人・所に降りかかる

A-1 のメタファーで、物理的には物として存在しない概念や状況、出来事が予想・意思に反し、または、

急にあたかも上から降ってくる物かのように表現される。人には変えようのない自然現象または人の意思によらない状況が示される場合が多い。例えば TR には *kaj* (仕事)、*cap* (圧)、*thanda* (寒さ)、*daitto* (責任)、*dōrkar* (必要)、*onushthan* (催し物) など。

また、「仕事」や「催し物」など、その事象に関与する人の行動を伴うことが TR になった場合には、着点を所格で示さずに *amar kaj* 「私の仕事」のように「関与者の TR」と属格で表現されることもある。完了相や過去時制 (*poṛ-ech-e / poṛ-l-o* など) では人がその出来事・行動に関与することになってしまったという事柄が降りかかったことを意味し、その出来事自体が既に発生したことを示している訳ではない。その出来事が過去に既に発生したことは過去完了 (*poṛ-echil-o* など) で表す。

a(2)	<i>daitto</i>	<i>amar</i>	<i>ghar-e</i>	<i>poṛ-l-o</i>	(作例)
	responsibility	1.SG.GEN	shoulder-LOC	fall-PST-3	
	責任が私の肩に降りかかった。				

A-3) スケールで表現される概念が、上の値から下の値に落ちる、下がる

物理的な上下の位置関係をスケールに拡張させた点で、A-2 とは異なる A-1 のメタファーであると言える。TR は上下変動のあるスケールを持つもので、例えば *dam* (価格) や *ojon* (重さ)、*jōnopriota* (人気)、*rag* (怒り) が挙げられる。

a(3)	<i>dolar-er</i>	<i>dam</i>	<i>poṛ-ch-e</i>	(作例)
	dollar-GEN	price	fall-PROG-3	
	ドルの価格が下がっている。			

A-4) 人や物が地に接して垂直な状態から意思に反し物理的に下方向の場所に倒れる、転ぶ

A-1 のメトニミーで、物理的な落下という事象に隣接した「倒れる」「転ぶ」行為を指す。TR が元の状態から下方向に移動することを意味する。起点は明示されず、また、着点の明示は任意だが明示されない場合も推測可能である。行為が TR の意思によらないという点が特徴的である。起点は明示されないものの、空間における上から下の位置移動を基盤としている点で A タイプに位置付けられる。

a(4)	<i>mee-ṭi</i>	<i>dhakka</i>	<i>khe-e</i>	<i>maṭi-te</i>	<i>poṛ-l-o</i>	(作例)
	girl-DEF	push	eat-PFV.PTCL	ground-LOC	fall-PST-3	
	女の子が押されて地面に転んだ。					

A-5) 人が通常状態から自身の意思によらず別の異常状態に陥る

A-4 のメタファー。元来の位置から別の位置への自身の意思によらない移動 (変化) を表すが、着点は物理的に下方向を指さず異常状態という概念的なものである。TR はその行動の主体で、着点には *bipod* (危険)、*mushkil* (困難)、*prem* (恋) などが挙げられる。

a(5)	<i>ami</i>	<i>prem-e</i>	<i>poṛ-l-am</i>	(作例)
	1.SG	love-LOC	fall-PST-1	
	私は恋に落ちた。			

B) 着点につく

このタイプの移動は上から下への位置変化に限らない。着点部分がプロファイルされ、経路の部分焦点化のイメージスキーマ変換が発生していると考えられる。起点には着目せず、着点への到達や接着が意味される。着点との関係性の観点からこのタイプにおいて更なる意味の細分が可能である。

B-1) 物が何かの作用で物に到達し、瞬間的に当たる

着点までの経路を移動していることが含意されている。その軌道の末、TRは着点に到達するが着点との接触は瞬間的である。TRには、*thappor* (平手打ち)、*lathi* (蹴り)、*laṭhi* (棒)、*cabuk* (鞭)などが挙げられる。

b(1)	<i>amar</i>	<i>gal-e</i>	<i>thappor</i>	<i>por-l-o</i>	(作例)
	1.SG.GEN	cheek-LOC	slap	fall-PST-3	
	私の頬に平手打ちが当たった。				

B-2) 物が物に生じる、つく、現れる

B-1とは異なり、着点までには物理的な移動はないか、移動があったとしてもその経路の移動は視覚的ではない。その意味で、Bタイプの中でも特に着点部分がプロファイルされていると言える。B-1のようにTRとして物が経路を通り外部から移動してくるというよりも、それが着点である物の表面に生じたり、匂いなどの非視覚的な物が着点に膠着したりする状態を表現できる。TRの例として、*morce* (錆)、*chata* (かび)、*phoska* (水膨れ)、*gôndho* (匂い)、*dag* (傷)などが挙げられる。

b(2)	<i>loha-e</i>	<i>morce</i>	<i>por-ech-e</i>	(作例)
	steel-LOC	rust	fall-PFV-3	
	鉄に錆が生えた。			

B-3) 人や物が外部から領域に到達し、踏み入る

TRの意思によらない何らかの作用でTRが外部から着点である別の空間・領域に到達し、そこに入り込むこと、留まることを意味する。着点を明示することが普通である。起点は明示されないが、着点の領域の外であることが推測できる。

b(3)	<i>gari-ta</i>	<i>jæm-e</i>	<i>por-ech-e</i>	(作例)
	car-DEF	traffic jam-LOC	fall-PFV-3	
	車が交通渋滞に入った。			

B-4) 人が領域に分類される、属する

B-3のメタファー。物理的な空間領域への移動ではなく、概念的な領域への概念的な移動を意味し、その移動はネガティブさや唐突さ、予想外さ、TRの意思によらない、といった性質を持つ。着点には、領域を持つ概念的な物、例えば団体など所属に関するものが挙げられる。*shikkhōk-er kache*「先生のところに」など着点が人を中心とした領域になる場合もある。

b(4)	<i>sei</i>	<i>lok-ṭi</i>	<i>cor-er</i>	<i>dōl-e</i>	<i>por-l-o</i>	(作例)
	DEM	man-DET	theft-GEN	group-LOC	fall-PST-3	
	その人は盗人の団体に入った。					

B-5) 数の概念を持つ物がある数量になる

これはB-4のドメインが数に適用されたものである。TRは数量的なスケールを持ちうるものであり、着点は数概念で、その数値がB-4の着点のような一つの領域としての概念であると捉えることができる。数的なスケールを持つ物とその数量スケールにおけるある数になるという数のシークエンス的な変化を示すことができる。

b(5)	<i>sadhinôta</i>	50	<i>bôchor-e</i>	<i>por-b-e</i>	(作例)
	independence	50	year-LOC	fall-FUT-3	
	独立が 50 年目に入る。				

C) 起点から出る

上述したように、このタイプも上から下への位置変化に限らず、起点から発する部分がプロファイルされ、経路の部分焦点化のイメージスキーマ変換が発生していると考えられる。そのため B タイプと異なり着点は焦点になく、その明示が不要である。

C-1) 物からそこに固定されていた別の物が離れ出る

起点の明示が可能だが、着点は通常明示されない。TR となるある物が、起点に位置する別の物に固定されていたが、そこから離脱することを意味する。TR には *cul* (髪) や *rôkto* (血)、*dât* (歯) などが挙げられる。

c(1)	<i>cul</i>	<i>matha</i>	<i>theke</i>	<i>por-ch-e</i>	(作例)
	hair	head	from	fall-PROG-3	
	髪が頭から抜けていっている。				

C-2) 人が元来居た場所や概念領域から意思に反して離れ出る

C-1 のメタファーで、物理的に人がそれを固定していた別の物から離れ出るのではなく、概念的な領域から自分の意思によらずに離れ出ること、追放されることを意味する。起点の例として、所属していた社会や集団などが挙げられる。*Bangla Bhashar Abhidhan* 第 2 版 (1986) でこの語義が言及されているものの、現代ではこの語義では *pôra* は使用されない。

D) 結果状態

このタイプでも B と C と同様に上から下への位置変化を物理的に意味しない。移動そのものではなく、移動の変化の結果に着目した、結果状態へのイメージスキーマ変換が起こっている。そのため、TR の結果状態を表す項が追加される点が他のタイプとは決定的に異なる。起点と着点は焦点から外れる。

D-1) 無標の項を伴い、人や物がある状態になる

TR は変化の主体となっている人や物を指す。修飾の機能を持つ語や数が別項として位置し、TR のその状態への変化を意味する。

修飾語を伴う場合、その状況への変化が表現される。同じ構文で *pôra* (おちる) と同様に *jawa* (行く) も使用されるが、*pôra* は想定外、唐突さなどの意味を持つという特徴を持つ。

d(1.1)	<i>mach</i>	<i>jal-e</i>	<i>dhôra</i>	<i>por-ech-e</i>	
	fish	net-LOC	caught	fall-PFV-3	
	魚が網に捕まった (=かかった)。				

(<https://www.jugantor.com/country-news/395442/যমুনা-সেতলের-জালে-বিশাল-বাঘাইড>)

その一方で、形容詞ではなく数詞や量に関する語を用いて、TR (価格や費用など) が掛かる、という量的な状態変化を表現することも可能である。量的な変化という観点では、B-5 の語義と類似しているものの、数詞や量が所格の着点として表されるか、別の項かという観点から、B-5 と D-1 の派生プロセスに相違があると考えられる。

d(1.2)	<i>khôroc</i>	<i>kôto</i>	<i>poꞛ-l-o?</i>	(作例)
	expenditure	how much	fall-PST-3	
	費用はいくらになった？			

D-2) 人や物が放置状態になる

D-1 のドメインが特定化され、TR は放置される人や物になり、状態変化の中でも特に手が加えられていない放置状態の様が意味される。D-1 のように修飾語を伴わずにそれを表現できる。また、完了相で表現される点に相違がある。*pôra* を前項動詞とした複合動詞（後項動詞に *thaka* や *ach* を伴う）で、その完了や継続状態が示される。

d(2)	<i>japan-e</i>	<i>sundor</i>	<i>ônek</i>	<i>bari</i>	<i>poꞛ-e</i>	<i>ach-e</i>
	japan-LOC	beautiful	many	house	fall-PFV.PTCL	be-3
	日本に綺麗なたくさんの方が家が放置されている。					

(<https://www.prothomalo.com/world/asia/সুন্দর-বাড়ি-পড়ে-আছে-খাকার-মানুষ-নেই>)

5. 考察とまとめ 以上の意味分析の結果、ベンガル語の *pôra* は、概念的な中心義—A-1 を中心にイメージスキーマ変換を含む合計 4 つのイメージスキーマのタイプから成り、各タイプにおいてメタファーやメトニミー、ドメインの特定化を経て 14 の語義がネットワークを構成しているということを提案する。また、構成するそれぞれの意味の性質として、意思によらない様、唐突、予想外である様が共通であることが指摘できる。*pôra* の概念的な中心義が「おちる」であることから「悲しみは下」（レイコフ&ジョンソン 1986）という概念メタファーが影響していること、また、物理的な動き「おちる」は行為主体の意思によらない重力に沿った動きであり、働きかけがなされ得ないこと（従って唐突さや予想外といった意味が生まれる）も *pôra* の意味のネットワークで重要な位置を占めることが指摘できる。

これまでベンガル語の動詞の多義構造について認知意味論の観点からほとんど分析が行われてこなかったが、本稿では認知意味論の分析手法を用いてベンガル語動詞の意味とそのネットワークを分析した。認知意味論の手法がベンガル語を分析する際にも有効であると言える。今回の分析を基にベンガル語の空間移動動詞の分析（他の動詞の意味分析や、意味拡張の一つと考えられる複合動詞での空間移動動詞の使用について等）を進め、空間認知や移動表現とベンガル語におけるそれらの現れ方を検討することを通して、ベンガル語学及び言語学一般への貢献を目指す。

6. 参考文献 ・ Biswas, S. (2000) *Samsad Bengali-English dictionary. 3rd ed.* Calcutta, Sahitya Samsad. ・ Das, G. (1986) *Bangla Bhashar Abhidhan. 2nd ed.* Kolkata, Sahitya Samsad. ・ Dewell, R, B. (1994) Over again: Image-schema transformations in semantic analysis. *Cognitive Linguistics* 5(4): p.351-381. ・ Fukada, C. (1997) Image schemas for *in-out* orientation: With special reference to *out, come, appear, occur,* and *emerge*. In *Papers in Linguistics Science* 3: p.61-76 ・ Johnson, M. (1981) *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason.* Chicago: The University of Chicago Press. ・ Khatun, S. (2000) *Bangla Academy Byabharik Bangla Abhidhan.* Bangla Academy. ・ Langacker, R, W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 1: Theoretical Prerequisites.* Stanford University Press. ・ Linder, S. (1982) What goes up doesn't necessarily come down: The ins and outs of opposites. In *Papers from the Eighteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, Chicago Linguistic Society, p.305-323. Chicago Linguistic Society, University of Chicago. ・ 松本曜. (2003) 「語の意味」. In 松本曜 編. (2003) 『シリーズ認知言語学 入門認知意味論』. 大修館書店. p.17-72 ・ 松本曜. (2021) 「意味派生の方向性と基本義の認定に関する実験的考察」. Retrieved from <https://www.researchgate.net/publication/349955238> (last access: 2021/09/19) ・ 靱山洋介 ・ 深田智. (2003) 「意味の拡張」. In 松本曜 編. (2003) 『シリーズ認知言語学入門 認知意味論』. 大修館書店. p.73-134 ・ 坪井栄治郎 ・ 早瀬尚子. (2020) 『認知文法と構文文法』. 開拓社. ・ レイコフ, G ・ ジョンソン, M. (1986) 渡部昇一 et.al 訳. 『レトリックと人生』. 大修館書店.